

平成18年1月19日  
(2006年)

西宮市教育委員会  
教育委員長 尾崎 八郎 様

西宮市社会教育委員会議  
議長 柿木 健一郎

「西宮のまちづくりと社会教育について」(意見)

現在の地域社会について考える際、私たちはよく昔と比較して、「昔はもっと住みやすかった」とか「人づきあいが悪くなった」とか言います。若い人たちにその比較は理解できないのですが、事実、私たちの暮らしや習慣、人間関係に対する考え方は、高度経済成長を経て、大きく変わりました。

たとえば、30年前の日本は、「他人に迷惑をかけてはいけない」という意識が今よりずっと強かったのではないのでしょうか。「ありがとう」「ごめんなさい」という言葉が、もっと素直に出ていたように思います。社会の変化の中で、私たちの心は気付かない間に良くない方向に変わってきたのではないかと危惧されます。

そのために、事件が起きるとその背景にある社会のあり方がクローズアップされ、事件との因果関係や社会教育のあり方が議論されることが多くなりました。中でも「家庭や地域の教育力低下」が指摘されており、国、地方あげて様々な取り組みが行われています。最近はこれに加え、「少子化社会への対応」が課題となり、西宮市をはじめ全国の自治体で次世代育成支援行動計画が策定されています。また、いわゆる団塊の世代が60歳定年を迎えるなど、間近に迫った高齢社会への対応も課題となっています。

西宮市においては、震災以降のマンションの建設ラッシュで子育て世代が多数転入し、人口の増加と年齢構成の変化が起こっています。これからは積極的に転入者に優しいまちづくりを進めていくことも大切です。こうした課題をできるだけ取り込みながら、西宮市が抱えているまちづくりの問題を社会教育の立場から考えて、提言とします。

記

1 市民参画と実践による社会教育(点から線へ)

一般的に「まちづくり」というと、道路や橋梁、上下水道、公共施設の建設など形のあるものをイメージします。それは、高度成長期に、都市基盤の整備に重点がおかれたことなどが理由と思われます。一方、「社会教育」といえば人の内面に関する精神的な分野であり、形として目に見えるものでないこともあって、まちづくりの観点からはあまり議論されてきませんでした。

しかし、阪神・淡路大震災やバブル崩壊で、「まちづくり」に対する私たちや自治体の

考え方、とらえ方が少しずつ変わってきました。そこに住む「人」がクローズアップされ、私たちの日々の過ごし方、楽しみ方、生き方などをどう創造するかが「まちづくり」の重要なポイントになってきました。それは、人の心に関わる大きなテーマであり、人間関係をどう築いていくかが重要な要素となります。

そこで「西宮のまちづくりと社会教育」で着目したいのは、文化活動、生涯学習活動、地域活動、ボランティア活動などの実践活動です。そこからは様々な成果、効果が期待できます。世代を超えた人の交流があり、人格形成にも通じる実践活動は、社会教育そのものです。このような活動に市民が参画し、文化や知恵、技能などが人から人へ伝えられていく中で、尊敬の気持ち、感謝の気持ち、責任感などが生まれます。「点」である個々人が活動に参画し人間関係を築くことでつながりができ、「線」になります。一人ひとりが自分の役割を果たすことにより、グループは強固なものになります。

現代の社会においては、効率性がかつてないほど重要な要素となり、効率化を実現するものとしてIT化が注目されてきました。今の時代は、IT抜きでは考えられませんが、IT信奉のあまり、人と人の直接的なコミュニケーションが非効率的なもの、排除すべきものとして扱われてきたことも否定できません。組織の一員として私たちもそれに慣れきってしまう。その感覚や考え方を家に持ち帰り、知らず知らずのうちに家庭や地域に悪影響を及ぼしているといえるのではないのでしょうか。

西宮市青少年問題協議会が平成17年3月に意見具申した「地域における青少年の居場所づくりの具体策」では、「電子メディア社会の進展にともない、人と直接ふれあい、関わるなど、コミュニケーションをとる機会が減って」いることが指摘されています。そして青少年が「積極的に参画し、地域住民と協働すること」の必要性が指摘されています。

直接的な会話の機会が減ったため、私たちは、コミュニケーションの取り方が下手になってきています。うまく自分の気持ちを表現できない、会話による心の交流が図れない、そのために言い争ったり、言葉がとげとげしくなったりする。この結果、更に人と話すことがわずらわしくなってしまう。人間関係をもたない点の集まった社会は大きな危険をはらんでいます。この悪循環を断ち切るには、効率性や損得を離れたところでの人間のつきあいや心と心のふれあいが必要です。それによって信頼と一体感が生まれます。

家庭での子育てにおいては、このところ虐待と過保護の二極化が進んでおり、原因の所在があいまいで複雑になっているように見えます。しかし、共通しているのはどちらも心の交流がうまく図られていないことで、ここに大きな問題があります。子どもの望みをかなえたり、笑顔を見たりすることだけが心の交流ではありません。「オンリーワン」の言葉のように子どもの個性を重視することもある面では必要ですが、個性と「わがまま」を取り違えている人も多いようです。勘違いの「わがまま」が高じて家族の絆や社会のルールが壊れかけていることが問題です。これは、子どもよりも、まずは親の理解を求めないといけない問題でしょう。

まちづくりの原点は、人間的な出会いであり、よい人間関係をつくることです。ここから活力や希望や思いやりが生まれると言っても過言ではないでしょう。

## 2 社会教育の核づくり（線から面へ）

市民参画のまちづくりを進めるために必要なのは「地域の核」づくりです。ここでは組

織としての核となる「団体」、また活動の場となる「施設」の二つについて触れます。グループや団体という「線」をつなぎ合わせて、これを「面」として広げていくことにより、地域の絆がより強いものになるでしょう。

まず、団体についてですが、西宮市内には地域を中心に活動している団体がたくさんあります。自治会、社会福祉協議会、老人クラブ、婦人会、子ども会、ボーイ・ガールスカウト、スポーツクラブ21などです。しかし、これらの団体がお互いに協力し合うようなケースは、多くはありません。それぞれが個別に行動しており、地域でともに何かをするという機会は少ないようです。団体の地域割りはそれぞれ別々で、活動場所が異なることも影響しているようです。

そんな中で、青少年愛護協議会や西宮コミュニティ協会は各団体の代表者たちで組織されており、地区によってはかなり活発な行動が行われています。このように、一つの目標の下に地域団体が連携するのは、有意義なことです。こうした活動を盛り上げ、失われつつある地域の祭りや運動会など交流の場を再び取り戻すのに、一役買ってほしいものです。

文化活動、生涯学習活動については、地域を中心としたグループもあれば、全市レベルで活動をするグループも数多くあります。同種の活動については、比較的定期的な交流が行われているようですが、異種目のグループについては、ほとんど交流がないようです。そんな中でも西宮芸術文化協会や西宮市体育協会のような横断的な組織のあり方が注目されます。

震災後、ボランティアグループの活動が注目されるようになりましたが、平成10年に特定非営利活動促進法が成立した影響もあり、NPOの活動が活発になっています。西宮市内に本拠を置くNPO法人が約50団体登録されています。こうした新たに生まれた団体や従来からの団体が活動目的に応じて連携するなどして、徐々に地域に溶け込みつつあります。NPOは環境や福祉、文化、教育など多彩な社会目的をもっています。中には団体間の連絡や交流、コーディネートを目的にした団体もあり、様々な可能性が期待されます。団体のネットワークを図るため、平成13年に西宮NPO連絡協議会が組織され、「西宮NPOサミット」が開催されるなど、協働にも力が入れられつつあります。

こうしたさまざまな団体の活動をコーディネートするためには、有能なリーダーが必要です。優れたリーダーシップを発揮する人材の育成に、市も積極的に協力すべきだと思います。特に、2007年からは、いわゆる団塊の世代が次々と定年を迎えます。この世代は、戦後の日本の発展を担ってきた人たちです。会社のためにつぎ込まれていたエネルギーと培われた知識、経験、指導力を地域の再生のために使ってほしいと思います。

次に、場としての施設の問題です。スポーツに関しては地区体育館に加え、スポーツクラブ21の発足で小学校が一つの拠点となりつつあります。文化活動、生涯学習活動、地域活動については、やはり地区市民館や共同利用施設、地区公民館が中心となります。これらの施設をもっと地域のものとして使いやすくすることはできないか、よく検討する必要があります。公民館は教育機関であるため、市民館に比べて利用に関する制限が多くなっていますが、目的に沿った範囲内でもっと利用しやすくできないでしょうか。また、館の事業運営や企画は中央公民館の職員と地区推進員が行い、施設管理等は地区公民館の嘱託職員、また夜間や休日の管理と清掃等は業者委託で行われています。この点ももう一度考える必要があると思われま

### 3 開かれた地域づくり、まちづくり

地域づくりのコンセプトとして、特に重要であり注意すべきことは、「開かれた地域づくり、まちづくり」をしなければならないということです。

市民参画の第一歩として、気軽に参加できることが最も大切です。すべてはここから始まるので、いくら内容がよくても参加してもらわないことには何事も始まりません。参加条件や手続きの段階でつまづくようなことがあってはいけません。

そして、グループ内部においては、世代を越えたつながりが強く求められます。それはグループの継続のためにも必要であり、活動内容もより豊かなものになるでしょう。同世代だけのグループでは、いずれ消滅するのは目に見えています。

さらに、西宮市に多い転入市民が溶け込みやすい雰囲気づくりが必要です。グループ、団体の目的や活動内容の情報提供に一層の工夫が必要で、新規加入者への丁寧な対応を心がけたいものです。

### 4 行政の対応について

市民参画が進むためには、その環境づくりや条件整備について行政の取り組みが必要です。現在、行政主体で市民参加が行われている生涯学習事業について考えてみます。

宮水ジュニア事業は、地域住民講師やNPOの協力により運営されていますが、今後はこの手法が他の分野においても参考となります。運営を、行政主体から徐々に住民主体へと転換していくことが必要ですが、そのためには十分な準備や経験と知見が必要でしょう。

中央公民館の主催事業では、市民企画講座が行われていますが、協力者にも受講者にも好評です。市民参加を求めるには、やはり企画段階からの参加が必要だと思います。

地区公民館では、推進員会事業が地域の皆さんの手によって運営されています。推進員は、地区ごとに選ばれますが、講座等の運営に当たって、現在は、中央公民館職員が助言しながら進められています。やはり主体性をもって事業を行うことにより、失敗の教訓や成功のよろこびが生まれ、創意工夫の意欲が育つのであり、それが本当の市民参画であると思います。

これまでの課題を整理すると、次のようになります。

#### (1) 人、団体を生かしたまちづくり

地域団体同士の有機的な結びつき

- ・ 青少年愛護協議会や西宮コミュニティ協会のように団体を横断する組織の活用
- ・ 地域の核としての働きに期待
- ・ 団体相互の連携
- ・ 地域のまつりや運動会の活性化（団体が共に集う催し）

文化・生涯学習関係グループのつながり

- ・ 芸術文化協会や体育協会
- ・ 新しいグループの育成と連携

NPOなどのボランティアと地域との連携

- ・ 地域を越えたエリアをカバーし多目的に活躍するNPOの意義
- ・ NPOの連携組織

リーダーシップを発揮できる人材の育成

- ・地域のコーディネーター
- ・新しい人を育てるシステム
- ・今後退職を迎える団塊の世代の活用

## (2) 地域の施設を生かしたまちづくり

### 地域の施設を通したつながり

- ・公民館事業を地域活性化の核とできないか
- ・公民館と市民館等の連携（指定管理者制度と併せて、公民館と市民館等との連携を図る必要がある）
- ・コミュニケーションの場として定着すること
- ・転入者が気軽に行ける施設に

### 新しい運営方法の研究

- ・公民館や市民館等の運営についてもっと地域にまかせられないか
- ・市民のためにもっと思い切った運営方法が考えられるのではないか

そこで、行政に対しては、次の点について対応されるよう望みます。

### 団体と団体、団体と行政の連携を図る

団体同士の連携や行政との連携を図るためには、お互いの主体性を尊重しつつ情報を共有し協力できるようにすることが必要です。この点で、市の工夫、支援を望みます。市民にとっても、種々の活動内容が一元的に分かれれば参加意欲も生まれるはずで

す。

地域の核として開かれた施設運営を図る。

多くの方が気軽に利用できる施設とするために、新しい制度などを利用しながら、自由かつ大胆に運営の工夫してください。

### 指導者の育成

各分野、各地域における指導者を育成することが重要です。特に、定年を迎える団塊の世代の力をうまく生かすような取り組みをすること。

### 行政内部の横の連携

市民参画のため「文化、生涯学習、コミュニティ」の行政分野は、特に横の連携を密にして、一体的に施策を進める必要があります。団体に対しても平等かつ統一的な対応が求められます。施設面では、公民館と市民館の役割を再確認し、連携を図り、使いやすいものにすることが大切です。文部科学省の中央教育審議会では、文化、スポーツ、生涯学習分野の市長部局への移管についての議論が行われていますが、まちづくりの観点からは、これについても積極的に検討すべきと考えます。行政においても西宮市生涯学習推進会議を中心に議論を深め、速やかに結論を出して対応されるよう希望します。

「社会教育」や「生涯学習」は教育委員会に任せておけばよいという認識はもう古いのではないのでしょうか。「社会づくり」「まちづくり」と結びつかない「社会教育」「生涯学習」のとらえ方は、この時代、あまりにも狭すぎると思うのです。

## 5 団体の対応について

団体においては、積極的に他団体との連携を図ってほしいと思います。そのためにはやはり、共同で事業を行うことが効果的でしょう。会員同士の意思疎通のため、できれば定

期的な交流が望ましいところです。また、会員外でも参加できるような催しも積極的に開催してもらいたいと思います。家族参加や異世代交流を図るため、事業の企画面でも様々な工夫をしてほしいと思います。

他市では、まちづくりにおいて、NPOや地域団体の役割への期待が高くなっており、実際に活躍し始めた団体も報告されています。本市にも、明日の西宮を担う頼もしい団体が生まれることを期待します。

#### 6 どのようなまちをめざすのか - 社会教育の役割

西宮市は、大阪市と神戸市の中間に位置する文教住宅都市で、緑豊かな山を背に青い海に開かれて、自然環境に恵まれた絶好のロケーションにあります。10の大学・短大が集積し、市民の文化活動やスポーツ活動もさかんです。このような西宮の優れた特性を継承しさらに発展させるためには、これを担う人づくりが必要です。すべての市民が希望や勇気や自信をもって生きることができるまち。皆が安住できるまち。そのようなまちをつくるためには、お互いが学び合い、励まし合い、助け合うことを通して、豊かな人間関係を築くことが必要です。そして、そのための仕組みづくりや環境づくりが大切なことは言うまでもありません。まちづくりにおける社会教育の役割がここに 있습니다。

今日の社会が様々の面で解体の危機に瀕しているときに、社会教育の果たすべき役割は一層大きくなっていると言わなければなりません。市民と行政が積極的に連携して社会教育を推進していくことで、西宮の未来が開かれると思います。